

生る

真宗大谷派 存明寺通信

NO.170

2016年(仏歴2547年)1月1日発行



右上から時計回りに ①存明寺の報恩講 ②京都東本願寺にて ③京都での最後の昼食会 ④ぞんみょうじこども食堂

お寺は出^であ^あいと学びの場

上の写真は昨年11月に行われたお寺の行事の写真です。そこには、お寺にっとう人々が写っています。年齢は、下はこども食堂にやってくる生まれたばかりの赤ちゃんから、上はだいぶ昔に若かった方たちまで…。

人々がお寺に足を運ぶきっかけは、人によつて様々です。大切な人を失った、漠とした不安があった、誘われた、楽しそうだった、などなど。言葉を換えれば、不安や悲しみや呼びかけなどが促^なしとなつて、私を押し出したということでしょうか。

そのような促しに押し出されて、人はお寺に足を運びます。そのお寺で行われていることは、出遇いと学びということです。人と出遇い、言葉と出遇い、教えと出遇い、自分と出遇うのです。

そして、教えを学び、親鸞を学び、人生を学び、自分を学ぶのです。

出遇いと学びの場としてのお寺。今年も存明寺はそのことを大切にしながら歩んでまいります。

どうぞ、そのような場の一員になってください。自らの居場所にしてください。それが存明寺の願いです。

存明寺 HP、リニューアルしました！ 親鸞と出遇うお寺

存明寺の HP <http://www.zonmyoji.jp>

そういう私は

どこへいくんだろう

その人は、母との別れをとでも悔やんでいました。親孝行らしいことは何もすることができず、それどころか、母にひどい言葉を投げかけ、ひどい態度を取ってしまったこともありました。それらを思い返しては、身を焦がすような思いに沈んでいました。今からでも母のために何かをしてあげたい、それがその人の願いでした。

やがてその人は、母のために立派なお内仏(お仏壇)を購入しました。そして、母が好きだったものをお供えしました。それが母への、せめてもの供養だと思ったからです。

しかし、ある時、その人は当然の事実に気づき、愕然としたのです。それは、いくらお供えをしても、それが一向に減らないという事実でした。いったい自分の思いは、母に届いているのだろうか。その人はとても不安になってしまいました。

そんなある日、その人はこんな言

葉に出会いました。そして、自らにとって大きな方向転換をすることとなったのです。

亡き人へ

いいところへ行くんだよ

と言う

そういう私は

どこへいくんだろう

その言葉は、亡き人の冥福をいのることだけが供養ではないということを教える言葉でした。

そして、私は一体どこに向かって生きていこうとしているのか。そのことを確かめていくことを、自らに迫ってくる言葉でした。

一体自分はどこに向かって生きてようとしているのか…。

やがて、その人はあることに気がついたのです。それは、今まで母の供養の為と思って自分がしてきたことは、自らの後悔の気持ちや自責の念を消すための行為ではなかったのか、ということでした。

身を焦がすような自責の念から、早く開放されたいという思いが、私の中にあつたのではないか。

亡き母を拝んでいるようで、実は自らが安らかになることを拝んでいたということに思い至ったので

す。

供養というと、亡き人の冥福をいのることだと思ってきました。しかし、それはどうも違うようです。

本当の供養とは、その人が確かに生きていたということを思い起こし、心に刻み、忘れないと誓う、ということでした。

こんな言葉もあります。

亡き人を拝む私が

亡き人から拝まれている

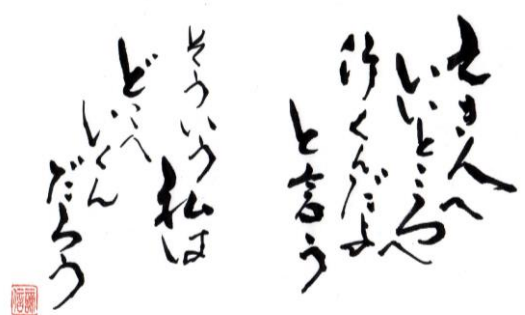
迷うな と

生きろ と

亡き人の冥福を拝んでいる私こそが、逆に亡き人から、迷わずに自らの人生を生き切ってほしいと拝まれているのです。

その人との別れを無駄にはしない生き方を、この私が始めていくということ。そこにこそ、本当の意味での供養ということがあるのではないのでしょうか。

(釋諦信)



◆おみがき奉仕御礼

- 甘田富子 内井照江
 - 岡田 真 片田律子
 - 岸木 勉 小林和子
 - 酒井陽子 酒井浩美
 - 酒井義一 佐藤尚宏
 - 佐藤眞彌 佐藤幸子
 - 角谷軍治 島田レイ子
 - 高橋昭彦 砂井テル子
 - 武田紀美 竹谷タケ子
 - 羽田節子 藤井俊五
 - 松本維邦 本多美津子
 - 山田一明 山口良子
- 報恩講法要に向けて、仏具のおみがきと清掃のつどい。
(敬称略・10月24日に実施)

親鸞につどう

報恩講(ほうおんこう)

11月2・3日にわたり、親鸞聖人につどう報恩講が行われました。講師に伊藤元先生(北九州市・徳蓮寺)をお招きし、2日間にわたってユーモアあふれ、奥行きのある深いお話をしていたきました。

1日目は、速夜法要のあと・伊藤先生からのご法話がありました。

2日目は、おとき(精進料理のお食事)をお召し上がりいただき、その後、伊藤先生のご法話、そして報恩講の法要が行われました。門徒感話は、岡田真さん(存明寺世話人)でした。深謝します。

◆伊藤元先生語録

- ・ 困った問題が、自分をさらに深めていく縁になる。
- ・ 日々の暮らしの中でひとつも出会いがなかったなら、人生全体が禍(わざわい)となる。
- ・ 諺(ことわざ)。ひとりの人の言葉にうなずく人がいれば、その言葉は響きながら人々に伝わっていくのだ。
- ・ 話を聞いても9割は忘れる。でも心に届いたことは忘れない。
- ・ これまで体験してきたことが無駄ごとではなかったという救い、それが浄土真宗の救い。

報恩講の写真集



←伊藤元先生のご法話



←おとき(精進料理)



←本堂での報恩講法要

大人のための修学旅行

真宗本願奉仕団

京都・東本願寺で行われた報恩講法要に参詣し、親鸞さまに出遇うための修学旅行。真宗本願奉仕団が行われました。参加者は22名でした。教導には高名和丸先生(奥羽教区)、補導に西堀秀行さん(山陽教区)、藤内淳心さん(仙台教区)にお世話になりました。

3日間にわたって、寝食を共にし、教えを聞き、自分を語る。そんなあったかな時間を過ごしました。

次回の修学旅行が決定しました。2018年秋、京都の同朋会館工事了り直後を目指します。

◆印象に残った言葉

- ・ 仏教で一番大事なのは、言葉に感動すること。(安田理深)
- ・ *如来は「こんな奴はだめだ」とは、絶対にいわない。(安田理深)
- ・ *今まで出会っていたはずの人と出会い直す。出会っていないと、出会っていないのは自分自身。(藤内補導)
- ・ *教えを聞く人、大事にする人がおるんだということが、僕の力になる。(西堀補導)
- ・ *誰もが等しく如来に愛されている。それが、同朋という人。(高名教導)

修学旅行の写真集



←親鸞の生涯を学ぶ



←最終日の全体座談会




←東本願寺での集合写真

真宗本願報恩講奉仕団 2015年11月27日～29日 於 真宗本願(東本願寺)

お寺のひろば 2016年(平成28年)

1月1日(元旦)	10時	修正会
3月12日(土)	2時	樹心の会
3月20日(日)	11時13時	春のお彼岸法要
3月26日(土)	2時	グリーンフケアのつどい
4月9日(土)	2時	樹心の会
4月28日(木)	10時	おみがき
5月3日(火)	12時	永代経法要
5月14日(土)	2時	樹心の会
6月11日(土)	2時	樹心の会
6月25日(土)	2時	グリーンフケアのつどい
7月9日(土)	11時	新盆合同法要
7月13日(水)	11時13時	おぼん法要
8月27日(土)	2時	青年のつどい
9月10日(土)	2時	樹心の会
9月22日(木)	11時13時	秋のお彼岸法要
9月24日(土)	2時	グリーンフケアのつどい
10月1日(土)	1時	日帰り川越への旅
10月8日(土)	2時	樹心の会
10月29日(土)	10時	おみがき
11月2日(水)	2時	報恩講の夕べ
3日(木)	12時	報恩講法要
11月26日(土)	2時	樹心の会
12月10日(土)	2時	樹心の会
12月17日(土)	2時	グリーンフケアのつどい
ぞんみょうじこども会		月一回
ぞんみょうじこども食堂		月一回
子育てサロン(ごちのへや)		月一回



2016年 存明寺の特別企画です

日帰り川越への旅

—小江戸・川越散策と—
—いも懐石を楽しむ会—

日時 2016年10月1日(土)
午後1時 本川越駅集合

内容 川越散策と寺院参拝
川越「いも膳」夕食会

会費 6000円程度

以前から温めていた企画です。
詳しくは春頃にお知らせいたします。
是非ご予約ください。



東京都世田谷区北烏山4-15-1
真宗大谷派 存明寺
住職 酒井義一
TEL 03-3300-5057
TEL 03-3300-5061
FAX 03-3300-5880
E-mail : sakai@zomyoji.jp

- 【あしがき】
- ▼新春を飾るお寺の掲示板の言葉から。
自分を悩ませている問題しか
自分を立ち上げられる御縁はない
(街角の掲示板 坂東性純)
 - ▼自分が直面する問題が、やがて自らを立ち上げさせ、歩み出させていく大切なご縁となっていく。そのような世界が浄土真宗の世界。そのような世界を一緒に確かなものにしていきたいと思います。
 - ▼さらに、もうひとつのお寺の掲示板から。
苦悩の有情をすてず
(境内の掲示板 親鸞聖人)
 - ▼人間が抱く苦悩を、きれいに消してくれる道が浄土真宗ではなく、苦悩したことが無駄ではなかったという世界、苦悩を通してのみ見えてくる世界があることを、ひたすら説き続けているのが親鸞の浄土真宗。
 - ▼一人ひとりがそのような世界を生きていくことを願いながら、存明寺は場を開き続けます。本年もどうぞよろしく願っています。
(住職・釋諦信)